

from visit in 1990

重要文化財 中村家

“Nakamura-ke Major Cultural Assets.

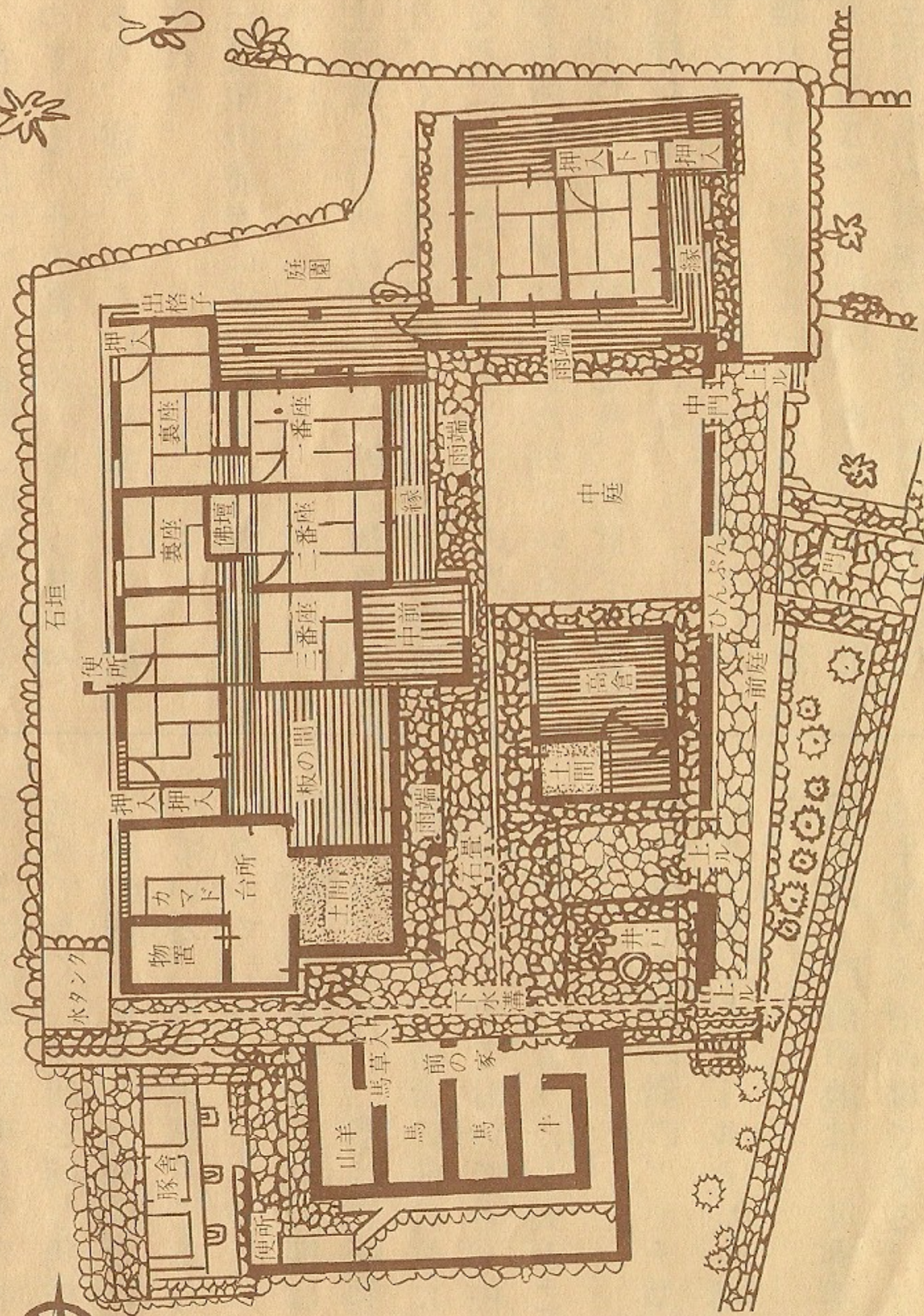
Nakamura-ke, a typical style of residence of the rich farmer in Okinawa, settled here in 1727. Mr. Eishun Nakamura, the present master of the family is the 10th generation.

The building was presumably built at the time of the 3rd. generation. It was originally roofed with bamboo leaves, and later, at the time of the 7th generation reroofed with red tiles.

Nakamura-ke has been called “Ohgusuku-Asato in common, and was one of the rich farmers in the middle region of Okinawa. The buildings as well as the other annexed structures represent the typical scale and appearance of the Ryukyuan private house.

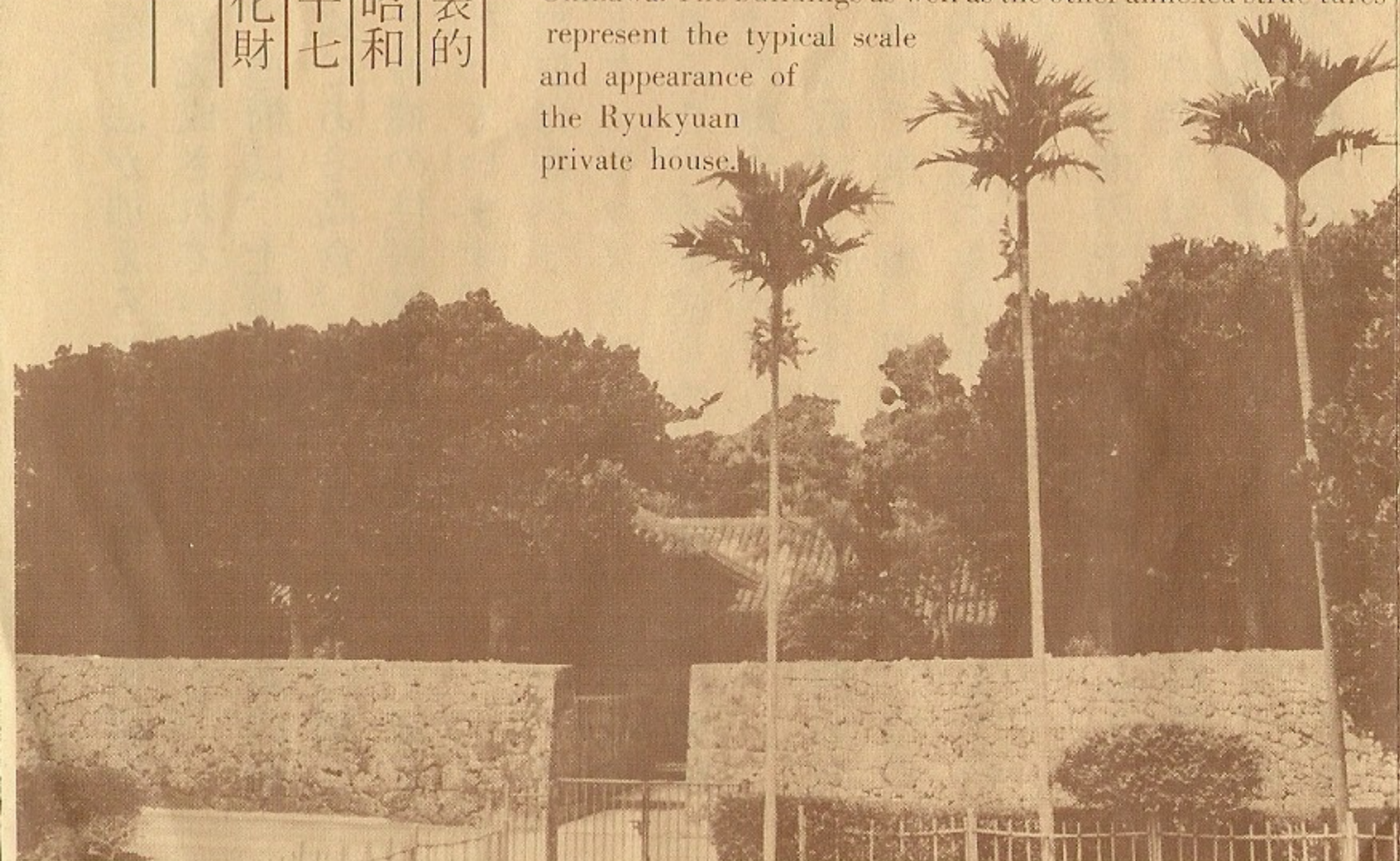
指定—中村家住宅は沖縄民家の代表的な規模結構を備えていることで、昭和三十一年に琉球政府より、昭和四十七年に日本政府によって国の重要文化財に指定された。

重要文化財中村家平面図



重要文化財 中村家保存会発行

沖縄県北中城村字大城一〇六 電〇九八九三二五二三五〇〇



重要文化財中村家

今から約五百年前中村家の先祖賀氏は、護佐丸が読谷の座喜味城より城を中城に移したとき、共に此地にその師匠として移ってきたと伝えられています。

その後、護佐丸、阿麻和利の乱があり護佐丸が滅びてしまふと、中村家の先祖も離散の憂悩にあいまし、一七二〇年頃、ようやくその家運を盛り返し、この地方の地頭職（本土の庄屋にあたる人）に任ぜられ、そして、

現存する建物が建てられました。本遺構は建てられてから約三〇〇年を経ています。

中村家の遺構―建築の本質的構造手法などは、鎌倉、室町時代の日本建築の流れを伝えているが、各部に特殊な構

造りがある。

母屋―正面に向って一番座（客間）、二番座（仏間）、三番座（居間）となつてゐる。その裏に各一間づつ裏座があり、寝室、あるいは産室として使用された。

三番座の前方には中前なかめという板間がついてゐる。

上座敷と台所の間に十二帖の板間があり、くつろぎの部屋で、農作物の整理などに利用された。そしてその次の端が台所でトングワと云われている。トングワには火の神を祀り、朔日、十五日拝むようになってゐる。

アシヤギ―母屋の東、縁で接続された離れをアシヤギといい、二男三男の分家するまでの宿泊所、あるいは、首里王府の役人が地方巡視の際に使用した



造手法が加えられて、独特な住居建築が完成されているといわれている。

遺構は、土族屋敷の形式に農家の形式である高倉、納屋、畜舎等が附随して沖縄の住居建築の特色をすべて備えています。

材質は総べて、チャージ（マキ）、イク（モッコク）を使用し、屋根は本瓦ぶき、漆喰塗りで、屋根の上に魔除けの獅子をおいています。

屋敷は、南面する傾斜地を切開いた敷地で東、南、西を石垣で囲い、その内側に福木を造成し、台風に備えています。

屋敷南面のやや中央の正門を入ると、その突き当りにヒンプンという石造りの顔隠しがある。そこを右折して、中門を抜けると庭（庭園とはちがう）と

といわれている。

高倉―中前の前の建物は高倉（モミ倉）で、この高倉は沖縄在来の形式である丸柱でなく、住居と同じ角柱を用い、上層の軒も瓦葺きの関係で軒が浅くなつてゐる。壁も板貼りであるのが特色となつてゐる。

前の家―西南の中二階の棟は、一階を腰石壁で畜舎、二階は黒糖製造用の薪置場である。畜舎の前の柱には、牛や山羊をくくつておいても、柱が土台からはずれないように工夫がこらされている。

豚小屋―北西の隅のアーチ型の三基連結の石囲いをフルといい豚小屋である。

用水池―門前の池は、災害用、あるいは牛馬の水浴み場である。